2000年度東京学芸大学近世史研究会

まなぶ

Vol. 4　緊急国際会議特別号

（通算98号）　編集責任者：根本・大嶋

2000年10月31日（火）

－「日本語の教育の現状と課題」－

報告者：アレクサンドル・フィリッポフ

★参加者★

大石学先生　院生：三野行徳、佐藤宏之　4年：池内宏尚、福井那佳子

3年：根本俊、橋本光晴、三浦秀喜　2年：大嶋陽一、小野順三、横山恭子

1年：中山真美子、古谷香絵　留学生：Schmidt・Jan、魯萍萍　（計　16名）

目次

東京学芸大学近世史研究会国際会議討議録　１～３Ｐ

近世史研究会国際会議参加記　４Ｐ
東京学芸大学　Ｂ類社会２年　小野順三
同　Ａ類社会１年　古谷香絵

日本・ロシア・ドイツ・中国友好記念写真　５Ｐ

２０００年東京学芸大学日本近世史研究会緊急国際会議討議録
「日本語の教育の現状と課題」
報告者 Ｐｈｉｌｉｐｐｏｖ　Ａｌｅｘａｎｄｅｒ（ロシア）
（サンクト・ペテルブルク国立大学　東洋学部　極東諸国史科助教授）
２０００･１０･３１（ｔｕｅ）Ｉｎ東京学芸大学サンシャイン６Ｆ

氏名	
大石学	江戸時代ごろロシアでは中国を通して日本教育が行われていたようであるが、ドイツではいつ頃、だれによって始められたのか。
Schmidt･Jan	シーボルトが日本から帰国していろいろな書物を出版したことに始まる。
大石	日本ではケンペルなどが有名だけどほかにどんなひとがいるのか。
Jan	もちろんんケンペルも有名で、あとバリニウスが有名でこの人は日本へ行ったことはなかったが、オランダのアムステルダムで日本の出島からオランダ人が持ち帰った書物などにより、日本の地理の本を出版し日本研究の基礎を作った。
池内宏尚	ロシアの日本教育の中で、日本の道徳はどのようにとらえられていたのか。
Phirippov Alexander	日本の文化などは中国から間接的には行ってきた。当時から、日本の道徳に対して強い興味があったようで、マルコポーロなどの人々によって日本のことが紹介され、日本はヨーロッパとは異なる文化を持ち、道徳も「義理」など日本独特のものがあると考えられていた。 明治時代には、互いに国交を開き交流する事によりいろいろと学んだ。そのころのロシア人は日本の文化をエキゾチックに感じていた。
大石	ここでの道徳は学問だけでなく文化としての道徳であった。
Alexander	また、空手、柔道、剣道などの日本の伝統的な武道により「礼」という日本独自の道徳観を学んだ。
福井那佳子	日本人が日本史を学ぶと、ロシア人が日本史を学ぶということはどう違うのか。
Alexander	ロシア人にかかわらず外国人が日本史を学ぶということは、いろいろと制限がありすごく大変なことで、特に、①日本語を理解すること ②書物(古文書)が少ないこと ③図書館が少ないことなどがある。外国人にとって、古文書を完全に読むことができるようになるには4~5年かかりとても大変。海外では、日本語で直接入ってくる文献は多いが、英語などに翻訳されたものは少ない。あるとしても、「源氏物語」など一部の有名なものだけである。
大石	ここには、中国・ドイツの留学生がいるが、「改革(Reform)」と「革命(Revolution)」は、それぞれの国によってとらえ方の違いはあるのか。日本の享保の改革は「改革」であるが、ソ連時代のペレストロイカはどうか。

Alexander	ペレストロイカは「立て直し」であり、どちらかというと「改革」に近い。「革命」というとロシア革命になる。
大石	ドイツではどうなのか。
Jan	ドイツでは「革命」というのは、国内が変わることをいう。
大石	中国ではどうなのか。
魯萍萍	中国で「改革」は古い政策、法律が変わることで、「革命」は暴力的に国が変わることである。
大石	日本には明治維新というものがあるが、それは「改革」なのか「革命」なのか議論があるが。
三野行徳	明治維新は少し特殊であって、「改革」と考える研究者もいるし、「革命」と考える研究者もいる。またもうひとつ「復古」という考え方もある。研究者によって違う。
大石	「改革」と「革命」の考え方は各国ともほぼ同じようであるが、これからもこの二つを考え続けていくことが大切であり、また、改革論ではその改革が権力者によって行われたものであるのか、それとも市民によって行われたものなのか考えることがとても大切である。
佐藤宏之	ここ最近ロシアにおいて日本研究が盛んになってきたのはどうしてか。日本以外の国の研究も同じように盛んになっているのか。
Alexander	ロシアにおいての日本研究は、ビジネス分野で盛んに研究されるようになり、また、日本以外の研究も同じように盛んになってきている。
Jan	ドイツでは、英語が学校などの公共の場で使われている。今ドイツで問題になっているのは、ドイツ国内の歴史を学校で教えるときにドイツ語でなく英語が使われているが、果たしてそれで本当によいのか、悪いのかということでありそれについて皆さんがどのように考えるか聞いてみたい。
Alexander	英語が世界中で通じるようになることは大切だと思うが。 ことし行われた日本研究の国際会議では基本的に英語が行われていた。そこには日本人の研究者もきていたが、彼らも英語を使っていた。しかし、そのような学会では、日本語と英語を一緒に使うのがベストだと私は思う。
大石	私も韓国の研究者と共同研究を行っているが、お互いの国の言葉を知らなくても英語を使えばある程度通じ便利だった。しかし、自国の歴史を学ぶときは母国語が有益だ。ドイツ語でしか分からないニュアンスもたくさんあり、それは英語では分からないものである。
Jan	私も自国の歴史を学ぶときは、その国の言葉を使った方がよいと思う。
大石	日本でも、英語を第二共用語にしようという意見があるが、英語は文化と

	文化をつなぐ一つの手立てとして使い、歴史や文化を学ぶときはその国の言葉を使うのがよいのではないだろうか。 書記 大嶋陽一

★緊急国際会議参加者★ ※ カッコ内は出身地
大石学先生(東京)、Philippov Alexander(ロシア)、大学院生:三野行徳(奈良)、佐藤宏之(新潟) 学部4年:池内宏尚(兵庫)、福井那佳子(東京) 3年:根本俊(茨城)、橋本光晴(群馬)、三浦秀喜(秋田) 2年:大嶋陽一(鳥取)、小野順三(大分)、横山恭子(富山) 1年:中山真実子(徳島)、古谷香絵(埼玉) 留学生:Schmidt Jan(ドイツ ハイデルベルク大学3年)、魯萍萍(中国 蘇州大学2年)

近世史ゼミ国際会議参加記

2年　小野　順三

今回Philippov Alexander氏の報告を聞き、ロシアにおいて日本の言語、歴史等の教育が進められていることを初めて知った。大学のみならず小学校、中学校、高校の段階から第二外国語の一つとして日本語を学んでいる学校もあるという。それと比較して現在の日本の教育においては、外国語は中学校から英語を教えるのが主流で、第二外国語の教育はほとんど行われていない。さらに、中学校、高校と6年間英語教育を受けても、コミュニケーションの手段として使うことも難しい状況だ。今回の討議の終盤で、或る国の歴史や文化を学びそれらを国際会議、学会で発表、議論する際に、英語とその国の言語を一緒に使いこなすことができるようになるのが望ましいという話題が議論されていたが、その意見にはわたしも賛成である。日本史の場合でも、専門的な歴史用語は数多くありそれを他国語一語で表すのはとても困難だと思うが、それを英語という共通語で置き換えることができれば便利ではあるが。

私は、Philippov Alexander氏の「日本語の教育の現状と課題」の報告を聞き、逆に日本における「外国語の教育の現状と課題」が浮き彫りになったような気がした。

日本近世史研究会緊急国際会議の参加記

1年　古谷　香絵

今回、私はアレクサンドル・フィリッポフさんの報告を聞いて初めて、受験勉強の枠から外れた違った視点からロシアと日本のつながりを見ることができたようなそんな気がしました。なによりも、ロシアで日本学、日本研究がされているという事実そのものに私は驚いてしまいました。驚くと同時に、書物、教室、設備、研究室、そして講師の不足という厳しい状況のなかでも途絶えず日本研究を続けているロシアの方の姿勢を日本人として素直に嬉しいと思いました。なかでも本当に日本のことしか知らない私にとって、ロシア国内の大学についてのお話は興味深いものでした。私立大学の学費が高いこと、大学卒業しても就職が厳しいこと、志願者が少なくなったこと等は少なからず日本でも共通していると思います。

報告はもちろんのこと、今回は本当に討議が面白かったです。ロシアで日本の道徳が認識されていたというお話は、初めて聞くことで「お～！」と驚かずにはいられませんでした。日本独特の「義理」や「人情」はロシアではどんな言葉に置き換えられて認識されたのだろう、という興味を持ちました。そして、なによりも国際会議ということで大石先生が提案なさった「改革（Reform）」と「革命（Revolution）」のとらえかたの違いのお話は、緊急国際会議ならではの面白い討議だと思いました。確かに似ているけど、微妙にニュアンスの違う双方の言葉を他の国ではどう捉えているかという話はこのゼミじゃなきゃ絶対できないと思います。（ちなみに、うちの家族は皆明治維新を改革だろうと言い張っていましたが・・）

本当に、今回の会議は私にとって密封したビニール袋に針で穴をあけたかのような新鮮で勉強になるものでした。いい体験をさせていただきありがとうございました。

まなぶ

2000年11月10日　初版

「検印廃止」
発行責任者　根本俊
　　大嶋陽一
監修者　　大石学
発行所　　東京学芸大学近世史研究会
　　代表者　橋本光晴
　　日本国東京都小金井市貫井北町4-1-1
　　TEL(042) 329 7116
印刷所　　東京学芸大学サンシャイン7F

本書を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上で全く禁じられていません。本書からの複写は好きなだけしてください。